

湘南慶育病院

症 例 概 要 症例概要

患 者：60代男性

病 名：パーキンソン病

入院期間：2024年12月(17日間)

【経過】

2019年 パーキンソン病の診断あり。

2024年3月 セカンドオピニオン目的で当院神経内科外来受診。

2024年12月 新薬「ヴィアレブ」導入目的にて当院入院。

【生活歴】

妻と2人暮らしであり、生活は自立していた。多数服薬があることから服薬忘れがあり、自宅内での転倒が頻回であった。

内 容

【入院時】

パーキンソン症状として、姿勢反射障害、仮面様顔貌がみられており、一日計8回、18種類の服薬を行っていた。多数の服薬があることから、特に午前中の服薬忘れが多く、オフとなる時間ができていた。それに伴い、姿勢反射障害の増悪が起こり、ご自宅内で転倒が頻回（約3回/日）であった。また奥様より「表情が暗く元気がなさそう（仮面様顔貌）」との発言も聞かれていた。ご本人とご家族の希望として「転倒しないようにしたい」、奥様の希望として「一緒に笑いたい」との話が聞かれた。

【チームアプローチ】

持続皮下投与システムである新薬「ヴィアレブ」を安全に導入することを目標にチームアプローチを展開した。医師は他職種への事前勉強会、服薬調整を行い、看護師は服薬管理、ヴィアレブの手順指導、ご家族への指導を行った。薬剤師はヴィアレブの投与量や他の薬との組み合わせを調整し、セラピストはリハビリテーションの介入時間を適宜変え、オン時間オフ時間の出現の確認とリハビリテーションを行った。退院支援看護師は支援センターとの退院調整や家族支援を行い、担当ケアマネや訪問看護師にも来院してもらい、退院後のヴィアレブの継続を支援した。

①ヴィアレブの事前勉強会

新薬を導入するにあたり、我々が薬の効果、副作用、導入方法を学ぶ必要性があった。ご本人の入院前に神経内科医と製薬会社担当者による勉強会を5回開催した。参加者は医師、看護師、介護士、セラピスト、MSW、薬剤師で、安全に導入するにあたっての知識を深めた。

②服薬管理・患者教育

ヴィアレブの流量の調整、手順指導・教育、服薬管理、家族指導を行った。医師、薬剤師、看護師、セラピストを中心に、ヴィアレブ導入後のオンオフ時間の観察を行い、医師が流量の決定を行った。ご本人へは毎日手順指導。教育を行い、奥様への指導は入院中9回実施した。

③リハビリテーション

ヴィアレブ導入後より、あえてさまざまな時間にリハビリテーションの予定を組ませてもらい、時間帯別における動作時のオンオフ現象の確認を行った。内容としては転倒予防のためのバランス練習を中心に実施した。

④退院後の支援

退院後も安全にヴィアレブを使用して頂くために、担当ケアマネージャーと訪問看護師に来院して頂き、病棟看護師、退院支援看護師、薬剤師、セラピストと退院支援カンファレンスを実施した。奥様の手技の確認、ケアマネージャーと訪問看護師へ機器取り扱いの説明を実施した。またセラピストから転倒しないための工夫や環境設定などの情報共有を行った。

【結果】

ヴィアレブ導入におけるオフ時間の短縮により、パーキンソン症状の出現が緩和され、入院中の転倒は一度もなかった。加えて、仮面様顔貌の症状も緩和され、奥様から「明るくなった!」とのお話を聞くことが出来た。また、ヴィアレブ導入により、服薬管理の面で課題であった午前中の時間薬を廃止することができた。ご本人と奥様への手順の説明により、ご本人による日中と夜間における流量の変更が可能となり、奥様おひとりで穿刺や針交換、デバイスの設定変更など全ての手順が実施可能となった。1ヶ月後の外来受診においても大きな問題なくヴィアレブを継続できている旨が聞かれ、奥様と二人で笑っている表情をみることができた。今回、ご本人の入院前、入院中、退院後と継続したチームアプローチにより、新薬であるヴィアレブを安全に導入かつ退院後の継続的な使用の支援につなげることができ、ご本人と奥様の希望を叶えることができた。